

『教行信証』における親鸞の思索において特に主題的に問題になっていることは、全体的に見れば「大無量寿経 真実之教 淨土真宗」と標榜されるように、『大無量寿経』の仏教ということである。それは教巻に語られるように、選択本願を宗とし、南無阿彌陀仏を体として、二回向（往相、還相）四法（教行信証、真仏土・化身土という次第において展開される親鸞の仏教理解である『大無量寿経』に返して言うならば、如来淨土の因果、衆生往生の因果を明らかにすることであり、淨土ということにおいて真実の教行信証を顕開することである。しかし、このような全体的視点を一点に集約して考えればどうなるか。それが親鸞における信心をめぐるの思索である。

このことの指標は既に法然においても見定められていたことである。法然の『選択集』全体の主題は、「選択本願念仏集」、「南無阿彌陀仏 往生之業念仏為本（先）」という題号と標榜、「然れば則ち釈迦・彌陀及び十方各々恒沙等の諸仏、同心に念仏の一行を選択したまへり。余行は爾らず。故に知んぬ、三経共に念仏を選びて以て宗教と為すのみ」と、その最終章に結論されてくるように、『三経論』、『大無量寿経』、『観無量寿経』、『阿彌陀経』、『淨土論』を基軸として師資相承される仏道、すなわち南無阿彌陀仏なる選択本願の行に帰するという一点である。このような法然の主張は『選択集』において、聖道・淨土二門の選び、正行・雜

行の選び、その選びの根拠としての本願への推求という次第として展開されていくのであるが、そのような展開を通して改めて問題となってくるのが「三心」の具足ということである。法然の廻心、雜行を捨てて正行に帰するということを決定づけている言葉は、「順彼仏願故」という一句である。従って、行の選びの根拠を選択本願に尋ねていくということは、同時にそれが選択本願の自証としての自身の信知を離れてはないことである。そこに『観経』の三心、善導の『観経疏』三心釈に依って展開される『選択集』三心章の主題がある。法然はこの『観経』の三心の了解を通して、特にその深心釈私積において、「当に知るべし、生死の家には疑を以て所止と為し、涅槃の域には信を以て能入と為す」として、選択本願の自証としての二種深信に流転か涅槃かの決着点を見ていく。煩惱を断ずるか否かではなくて、疑か信かが、成仏を決定するという指摘がそこに為されてくるのである。

このような法然による問題指摘を受けて親鸞は仏道を決定づけてくる中心問題として信心に焦点をあてるのである。親鸞の信心に関する主要な主張は、信心は如来願心の回向成就であるということ、そして信心のみが唯一の涅槃の真因であるという二点である。「然るに常没の凡愚、流転の群生、無上妙果の成じ難きにあらず、真実の信樂実には獲ること難し。何を以ての故に、乃し如来の加威力に由るが故に、博く大悲広慈の力に因るが故なり」という『教行信証』信巻の始めの言葉は、信心ということにおける課題性を端的に語っている。親鸞は、人間の仏教における課題は「無上妙果を成」ずるか否かということではなく、真実信心の獲得にあると語るのであり、しかしその獲信ということはどこまでも如来願心の回向成就としてあるとするのである。そして親鸞はこ

のことを明らかにしていくについて、法然による三經一論という指示、なかんずく『大無量壽經』に説かれる選択本願、第十八願の「至心・信樂・欲生」の三心と、『浄土論』に表白される「一心」との呼応を軸として迫っていく。それが信巻における三心一心の間答である。

「爾れば若くは行、若くは信、一事として阿弥陀如来清淨願心の廻向成就したもう所にあらざることあることなし。因なくして他の因のあるにはあらざるなり。」という信巻前半の経論釈を受けての結論に引き続いて、親鸞は『浄土論』の「一心こそは、「至心・信樂・欲生」を合した涅槃の真因として信心であり、そのことを字訓を通して確かめて後、信心が涅槃の真因であることの道理性を、至心・信樂・欲生と誓願される因位法蔵の願心へと推求していくのである。この第二問答、仏意釈においてまず語られるのは、「一切群生海」には、「清淨の心なし、真実の心なし」「清淨の信樂なし、法爾として真実の信樂なし」「真実の回向心なし、清淨の回向心なし」という、無明煩惱流転生死の衆生の相である。そこには断惑証理を以ては尽し得ない衆生の煩惱業相の世界が徹底的に見定められている。それは徹頭徹尾、「出離の縁あることなし」と言われるべき事態である。そしてこの人間からの如来浄土への関わりの絶対的な否定において、その否定を通して表現されてくること、それが法蔵因位の兆載永劫の修行である。仏意釈は、この一切群生海の具体相と法蔵永劫修行を軸として、如来至心の廻施、無碍広大の淨信の廻施、利他真実欲生心の廻施という次第で展開されていくが、総じての主題は三一問答の直前に結論された「因なくして他の因のあるにはあらざるなり」ということと、第一問答に問題とされた「涅槃の真因は唯信心を以てす」

ということを、法蔵因位の願心という一点に統括して答えていくということであり、信心の根拠が如来にあるということを明らかにすることである。

信心の根拠が如来にあるとは、成仏を内在的に考えることではない。しかしまた対他的に考えることでもない。親鸞は、生死に輪転していく存在を涅槃に能入する存在たらしめるのは、如来清淨願心の回向成就としての信心であり、それは一切群生海と語られる衆生の現実を場として、そのような現実からの脱離を祈念して行われる人間の一切の行修の否定において、その根源に働き続ける事実、法蔵因位の願心に値遇するか、否かということにおいて確かめてくるのである。それは換言すれば、清淨真実なる寂滅平等界に一切群生海を帰せしめんがために、一切群生海の行信として従果向因する選択本願の願事としてのみ、涅槃の真因、必ず仏となるべき身と定まるといふことがあることである。

親鸞の主張は、信心を獲れば「煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたる」ということである。しかし、その獲信ということとは、如来大悲回向のこととしてのみあるが故に、「真実の信樂実」に獲ること難し」と言われる。そこには自力の心をひるがえし捨てることが要求されている。自己自身をあるいは自己に想念される何らかの対象を絶対化して自立しようとするこの否定がそこにある。親鸞による信心の確かめは、そのような自力の心の否定を通して、一切に先立ってある存在の根拠を、今現在の自身に見開くということであり、そのことが南無阿弥陀仏に帰するという選択本願の道理の上に自証されていったのである。